

ジェームズ・C・スコット

『モラル・エコノミー ——東南アジアの農民叛乱と生存維持』

高橋彰（訳），勁草書房，1999

James C. Scott. 1976. *The Moral Economy of the Peasant: Rebellion and Subsistence in Southeast Asia*. New Haven: Yale University Press.

モラル・エコノミーとは何か

モラル・エコノミーという用語を最初に用いたのは、ジェームズ・C・スコット（James C. Scott）ではない。イギリス史家のE・P・トムスン（E. P. Thompson）である。トムスンが主著「18世紀イングランド民衆のモラル・エコノミー」（1971）で扱ったのは、産業革命の黎明期、穀物価格が大きく変動し、食糧が欠乏する中、度々勃発していたロンドンの民衆暴動であった。暴動を理解するうえでトムスは、経済学的な数量分析ではなく、社会人類学的な考察の必要性を説く。ここでトムスンが述べるモラル・エコノミーとは、コミュニティの中で守られ、穀物価格を抑制し、食糧の公平な分配を促す、権利や慣習、義務、規範などに関わるさまざまな伝統的な考えである。それらがかつて政府や、穀物の生産・流通・加工・販売に関わる農家、穀物商人、粉挽屋、パン屋らによって守られてい

た。だが、こうした業種に携わる人々は、18世紀に入り市場経済が拡大すると、コミュニティから離脱して自己利益を追求し始めた。自由放任経済を擁護する政府も、市場への介入に消極的になった。こうして、民衆の生存をかつて支えた、コミュニティのコンセンサスとしてのモラル・エコノミーが遵守されなくなってゆく。この遵守を求め、民衆は突発的に暴動を起こしていたとトムソンは論じたのである（Thompson 1971）。

スコットの学術的な貢献は、トムソンのモラル・エコノミーという概念を、20世紀東南アジアの農民叛乱に援用し、議論を深化させ、論争を巻き起こしたことである。スコットによれば、東南アジアの農民（peasant）は、平均収益を極大化するよりも、災害に見舞われる可能性を極小化することを選好する、安全第一主義者である。つまり、生存の危機を極小化するために、高収量が見込まれる新しい稲種や耕作技術を導入するよりも、収量が低かろうとも、災害に強い在来種や伝統農業に重きを置くような危険回避者であるという。前述のトムソンの民衆への見方と同様、このスコットの農民に対するまなざしは、社会から自立して自己利益の追求を選好する、新古典派経済学の前提とする「経済人（*Homo Economics*）」という人間像とは正反対の立場であった。

このような人間観に基づき、スコットは、伝統的な東南アジア村落には、互酬的な相互扶助の規範や村落共有田の分配、不作でも農民の最低限の取り分を保障する分益小作制など、農民の生存倫理（*subsistence ethic*）、すなわちモラル・エコノミーが存在したと述べる。農民の支払う地代や小作料に依存していた国家や地主も、互酬的な規範を遵守し、農民を庇護する義務を負ったという。このような伝統的な東南アジア村落の姿としてスコットが念頭に置いたのは、フランスの人文地理学者ピエール・グルー『トンキン・デルタの農民』（1936）に描かれたベトナム北部紅河デルタ村落の強固な結束であり、また文化人類学者クリフォード・ギアーツ『インボリューション』（1963）が論じたインドネシアのジャワ村落における「貧

困の共有」という慣行であった。

スコットによれば、このような東南アジア村落は西欧諸国によって植民地化されて以降、資本主義的な世界市場に統合されてゆく。土地や生産物の商品化、フロンティアの開拓が進み、農村人口が急激に増加するとともに、少数の大地主が多数の小作農や農業賃労働者を支配する状況が各地で生まれた。市場経済に適応し、相対的に農民に対する権力を強めた地主は、収益増大を図って定額の地代や小作料を農民に課すようになった。さらにこうした地主の財を植民地国家は保護するなど、かつての伝統村落において農民の生存を支えた倫理は遵守されなくなったという。

こうした変化は、とくにベトナム南部や下ビルマのように、植民地化以降に開拓が進んで輸出米生産地となったフロンティア地帯で顕著であったとスコットは指摘する。世界恐慌の影響が1930年代に東南アジアに直撃すると、地主や国家の取り立てがさらに厳しくなり、小作農から賃労働者に転落する農民が増加した。危機に陥った農民は、守られなくなった生存倫理を取り戻すべく、地主や国家に対し勝ち目のない絶望的な叛乱を起こすようになった。こうした農民叛乱が、表面的には共産主義運動や、ベトナムのカオダイ教、ホアハオ教、ビルマのサヤーサンの叛乱といった新宗教による千年王国的運動の形態をとったと、スコットは指摘する。

モーラル・エコノミー論争とベトナム戦争

21世紀の読者からすると、叛乱というテーマは、古めかしい問題に思えるかもしれない。スコットが1976年に原著 *The Moral Economy of the Peasant* を刊行した当時は、多くの人文社会学者が第三世界の民族解放闘争に関心を払っていた時代であった。中でも、東南アジアは、20世紀後半にアメリカに大きな衝撃を与えたベトナム戦争の渦中にあり、米軍と戦う東南アジアの農民ゲリラは、多くの人文社会学者に驚きと共感を持って受け止められていた。スコット自身、後年に出版された別著のまえ

がきで、『モーラル・エコノミー』出版当時、ベトナム戦争への関心や民族解放闘争に関する学術的なロマンスによって、農民叛乱が過剰に注目されていたと振り返っている (Scott 1985: xv)。とりわけ 1975 年、米軍が多大な犠牲を払って駐留・支援した南ベトナム国家が崩壊したことで戦争が終結し、翌年には米兵とゲリラ戦を展開した共産党が南北ベトナムを統一するという衝撃的な出来事が起こった。この変化を目の当たりにしたアメリカでは、東南アジアの農民叛乱や革命運動の核となった農民の行動原理をめぐる学術的な関心が、著しく高まっていたといえよう。このような時代状況の中で著されたのが、本書であった。

ところで、スコットの展開したラディカルな議論は、とくに新古典派経済学の影響を受けた研究者から反発を招くことになった。その急先鋒にいたのが、ベトナム戦争中に南ベトナムに滞在して政治分析を行ったサミュエル・ポプキン (Samuel L. Popkin) である。ポプキンは、1979 年に『合理的農民』を刊行し、植民地化以前から農民は、生存危機の有無にかかわらず、個人的利益の増大を選好してきたという、スコットとは正反対の立場であるポリティカル・エコノミー論を展開した。

ポプキンによれば、伝統的なベトナム村落において、規範は農民の生存保障になっていなかった。有力者は自己利益を追求して職権を濫用し、一般農民との間で常に不平等が存在していた。伝統村落は階層化され、村落のメンバーシップを持つ内籍民と、それを持たない、他地域からの流入者である外籍民がいた。飢餓が生じた際に内籍民は、権益と収益の少ない外籍民を切り捨てることで自身の生存を確保した。こうした理由により、自己利益を選好する農民は、村落規模の互酬的な相互扶助や生存保障に投資、依存するよりも、子どもへの援助や貯蓄を通して得られる個人的な福利を選好する。そして叛乱や革命など、公共投資としての共同行動をリスクの高いものとして避ける。つまり、共同行動に参加した場合、何もせず共同行動の利益に「ただ乗り」しようとする者が出現し、不利益を被ること

を恐れる。したがって、優れたリーダーシップを持った農村外部の指導者が「ただ乗り」を抑止し、共同行動への参加が個人の利益に適うことを示して初めて、農民は共同行動に参加する動機を持つに至るとする。ベトナム共産主義者が主導した民族解放闘争や農業集団化は、共同行動へ農民を動員することにとくに成功した好事例であるとする (Popkin 1979)。

スコットとポプキンの相容れない見解は、後に「モーラル・エコノミー論争」、ないしはその主要な論者たちの名をとって「スコット・ポプキン論争」と呼ばれ、さまざまな特集が組まれた (末尾の参考・関連文献を参照)。この論争は、単純化していえば、人間を、文化や社会、生態環境に埋め込まれた存在と理解するのか、あるいは、そうした周囲の環境から自立し、自己調整型の経済システムの中で合理的な選択を行う「経済人」と捉えるのかという、人間観の違いに由来する。

本書以降の著作

スコットは、ポプキンの批判に反論こそしなかったものの、叛乱や革命のような共同行動の形態にはならない不満の示し方について、そしてこうした不満の背景にも倫理の問題が潜在していることについて、後の研究で明らかにしてゆく。モーラル・エコノミー論争で争点となった個人／コミュニティの利益をめぐる不毛な議論ではなく、農民個々人の行動と規範意識に焦点を合わせるようになった。その成果が、著書『弱者の武器』(*Weapons of the Weak*, 1985) である。

同著は、『モーラル・エコノミー』で描かれた伝統村落の姿とは大きく様相が異なる、市場経済化の進んだマレーシア・ケダ州の農村でスコットが行った民族誌的調査に基づいており、農村のパトロン・クライアント (親分子分) 関係の変化に焦点が当てられる。政府主導の農業改革「緑の革命」の恩恵にあずかり、コンバイン (稲刈り機) を導入するなどして貧困層の労働に依存しなくなった富裕層と、その結果仕事を失い富裕層から

貸付けや施しを得られなくなった貧困層の間で、資源や倫理をめぐる日常的なせめぎあいが生じていた。農村の支配者である富裕層は、かつて貧困層への支配を正当化するために村落の規範を利用したが、その規範を盾に、従属的な立場である貧困層は、陰口を叩いたり仕事を怠けたり、盗みを働くなどした。日常の中で非組織的に行われるこうした抵抗は、規範を守らない富裕層を批判し、かつて規範から得られていた利益の確保を求めるための行動であった。スコットは支配者が新たに敷こうとする規範をめぐる、従属的な立場の人々が従来の規範を参照しながら、抵抗や応諾などの選択を意識的に取っていると論じた。

この主張は、労働者や農民が支配者に「搾取されている」状況を正確に認識していないとする、マルクス主義者の虚偽意識論を批判したものであった。実は『モーラル・エコノミー』の7章においても、叛乱は報復や死の危険をとまなうため、歴史上の農民は、より危険の少ない抗議行動として農作物、家畜の窃盗や持ち逃げ、あるいは嘲笑、歌、伝承などを通じて、支配者に不満を示していたことが触れられていた。スコットは、叛乱に加わらなくとも農民は支配者による規範の不遵守を見破っており、支配者の社会秩序を宿命的に受容しているわけではないことを強調していたのである。

前近代であれ近代であれ、人間個々人は、所属する社会の中に埋め込まれた存在であると同時に、その社会が変化によって揺らぎ始めた時には、状況を調整したり、時にそこから離脱したりする。スコットのこうした思想は、後の一連の著作でさらに展開されてゆく。『国家のように見てみる』(Seeing Like a State, 1998)では、20世紀に科学技術と同様に社会は合理的に設計できるとするハイモダニズムの思想が、社会を単一化(simplification)し「読みやすく(legible)」しようとする国家事業へと結びついていったこと、そしてこうした諸計画がいずれも、多様で複雑に入り組んだ土着の社会や生態環境の改変に失敗したことを論じた。さらに『ゾミア』(2009)

では、前近代、東南アジア、中国、インドにまたがる山岳地帯が無国家空間であったとし、奴隷、徴兵、徴税、戦争といった平地の国家建設から距離を置こうとする人々の避難地域であったとする。『モーラル・エコノミー』から派生したスコットのラディカルな議論は、その評価をめぐって賛否両論こそあるものの、現在に至るまで論争を巻き起こし続けている。

参考・関連文献

- ジェームズ・C・スコット、佐藤仁（監訳）、2013、『ゾミア—脱国家の世界史』みすず書房。（原著：Scott, James C. 2009. *The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia*. New Haven: Yale University Press.）
- 加納啓良、1994。「農民革命の政治社会学—東南アジアからの試論」『世界政治の構造変動 3—発展』坂本義和（編）、岩波書店。
- クリフォード・ギアーツ、池本幸生（訳）、2001、『インボリューション—内に向かう発展』NTT出版。（原著：Clifford Geertz. 1963. *Agricultural Involution: The Process of Ecological Change in Indonesia*. Berkeley: University of California Press.）
- 白石昌也、1980。「ジェームズ・スコット『農民のモーラル・エコノミー』に関する覚書」『アジア研究』26（4）。
- 、1984。「東南アジア農村社会論の最近の動向をめぐって—モーラル・エコノミー論とポリティカル・エコノミー論を中心に」『東洋文化』64。
- 高田洋子、1985。「スコット・ポプキン論争をめぐって」『東南アジア—歴史と文化』14。
- 原洋之介、1983。「東南アジア農村社会論—地域研究と経済理論」『東洋文化』63。
- 、1985、『クリフォード・ギアーツの経済学—アジア研究と経済理論の間で』リポート。
- ピエール・グルー、村野勉（訳）、2014、『トンキン・デルタの農民—人文地理学的研究』丸善プラネット。（原著：Pierre Gourou. 1936. *Les paysans du Delta tonkinois: étude de géographie humaine*. Paris: École des Études française Extrême Orient.）
- Keyes, F. Charles. 1983. "Peasant Strategies in Asian Societies: Moral and Rational Economic Approaches—A Symposium: Introduction." *Journal of Asian Studies*. 42(4): 753-768.
- Popkin, Samuel L. 1979. *The Rational Peasant: The Political Economy of Rural Society in Vietnam*. Berkeley: University of California Press.
- Scott, James C. 1976. *The Moral Economy of the Peasant: Rebellion and Subsistence in Southeast Asia*. New Haven: Yale University Press.
- 、1985. *Weapons of the Weak: Everyday Forms of Peasant Resistance*. New Haven: Yale University Press.

- . 1998. *Seeing Like a State: How Certain Schemes to Improve the Human Condition Have Failed*. New Haven: Yale University Press.
- Sivaramakrishnan, K. 2005. "Introduction to Moral Economies, State Spaces, and Categorical Violence." *American Anthropologist*. 107(3): 321-330.
- Thompson, E. P. 1971. "The Moral Economy of the English Crowd in the Eighteenth Century." *Past & Present*. 50: 76-136.

❖本書の著者紹介（ジェームズ・C・スコット）

1936年アメリカニュージャージー州マウントホリー生まれ、イエール大学政治学・人類学名誉教授。専門は政治学、人類学。本書以外で日本語に翻訳されている著書は、下記のとおり。

2013.『ソミア―脱国家の世界史』佐藤仁（監訳）。みすず書房。

2017.『実践 日々のアナキズム―世界に抗う土着の秩序の作り方』清水展ほか（訳）。岩波書店。

2019.『反穀物の人類史―国家誕生のディープヒストリー』立木勝（訳）。みすず書房。

❖執筆者紹介（下條尚志）

神戸大学大学院国際文化学研究科准教授。専門は歴史人類学、東南アジア地域研究。学部生のときに感銘を受けた本は、カルロ・ギンズブルグ。杉山光信（訳）。2003.『チーズとうじ虫―16世紀の一粉挽屋の世界像』みすず書房。